

# 鷗外における共同体と個

——歴史小説集『意地』三部作の構造——

藤本千鶴子

## 一 共同体と個

第一歴史小説集『意地』三部作における鷗外の認識構造を、共同体と個という観点から、とらえ直してみたい。

鷗外文学の終生のテーマは、東洋と西洋、国家社会と個人、公と私の相克および調和の課題であったとされている。私もそれに首肯する者だが、今一つ漠然としているので、共同体の原理と個の原理との相克および調和の課題と言い直すなら、より鷗外テーマの実体に即すのではないかと考える。それは各々何をさすかという点、木下李太郎の「希臘以来欧羅巴文明の真髓たる美と自由との尊崇と東洋古来の道德の根源たる孝道の遵守との間に存する軒輊である。」<sup>1)</sup>を参考にし、少し訂正した、以下のようなものではないか。日本文化の本質たる、忠義や孝行の道德（日本の共同体原理）と、西洋文化の本質たる「自由と美」（個の原理）との、相克および調和の課題であると見たい。

傍線部東洋の孝道については、中国の共同体でこそ、巨大な宗家に對する孝道が最高価値とされ、かつ、タテの忠よりヨコの仁が重視さ

れている（『菊と刀』）が、鷗外の関心は中国や東洋ではなく、あくまで日本にあって、「青年」や「かのやうに」において、日本の忠義第一、孝行第二の道德の、近代的改良に心をくだいているからである。

他方、若き鷗外が西洋文化の本質を、自由と美（ナウマン論争）、すなわち学問と芸術の二分野に限って、自由平等博愛三位一体の市民革命の原理から、平等と博愛を排除したのは、注目すべきである。平等は、天皇を頂点とする、日本の階層社会の実態と政治的に背馳し、博愛は、キリスト教に源を発するので日本の国教の神道となじまないからではあるまいか。出発時点から、鷗外の「自由」の発想には、国家レベルの支配（父権）と束縛感があったものと思われる。処女作「舞姫」に、官長と天方伯の手、すなわち国家の手によって「足を縛り放たれし鳥」の「自由」と書かれているのでもわかる。

ところで、私の、共同体という切り込み方が適切かどうかという問題だが、鷗外自身はこの語を使っていないけれども、実質的には、日本の国家が近代的ゲゼルシャフトではなく、前近代的ゲマインシャフトだと見て、深い洞察に至っていたと思われる。

「舞姫」に、「大臣は既に我に厚し、されどわが近眼は唯だおのれ

が尽くしたる職分をのみ見き。」とあるのは、人格の一部である「職分」のみの合理的契約(ゲゼルシャフト)だと思ひ込んでいたら、実は全人格的にゲメインシャフトの糸に「操つ」られていたという自覚である。また、天方伯の婦国の促し方は、「往きて見れば待遇殊にめでたく、魯西亜行の勞を問ひ慰めて後」とあるように、テニエスが、母の子に対する關係を「養い守り導く」と説明している語句と相似た上からやさしく包まれる快さである。太田がその快さに油断している虚を突いて、いきなり結論から、婦国をすすめ、「君が學問こそわが測り知る所ならね」と、「我學問」への飢えという太田の急所を握って甘い誘惑をほめかす一方、太田の民間學は日本にとって危険だから、「語學のみにて世の用には足りなむ」と釘をさす。前に官長が父權的支配によつて太田の反抗を受けたのと違つて、天方伯の糸の「操つり」方は、巧妙で、相手次第で父權を表立てずに、契約と母性も利用する。これは、丸山真男が「日本の思想」で、日本の文化は、異質の思想と交わらずに併存している「雑居的無秩序」文化だと規定するのと相通じる、痛烈な近代批判になっている。つまり、テニエスが母子結合の麗しい肯定面だけを社会学の研究対象とし、また、近代国家はゲゼルシャフトだとしたのに対し、鷗外は、もっと複雑で特異な、日本近代共同体の「甘くやさしい残酷性」を描いてみせた。「舞姫」は、太田の自我がやさしく包まれ(善母)、巧妙に導かれ飲み込まれ(恐母)、日本共同体という有機的生命体の一部になってしまうことへの、「人知らぬ恨」の情念がテーマであると言えよう。

さて、雅文体の「舞姫」では、學術的な共同体という語は当然使わないにしても、思想小説「青年」や思想史評論「古い手帳から」では、

これをどんな語で表しているか。鷗外は、ゲメインシャフトに相当する社會を「共同生活」の社會、ゲゼルシャフトのそれを「功利主義の社會」とし、一対の対立概念としている。前者の特徴を、「人間天賦の仁」「社會感情」「共同生活の策勵」で結合した、「有機物たる國家」、「共同生活の束縛」はあるが、「種屬の利害は主にして、個々の利害は從」にする「利他」だとし、他方、後者の特徴を、「器械的國家」、「國法は個々の人民をして快適を得しめむがための契約で亦復打算」であり、「自利」だとしている。鷗外はテニエスの「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」(明治21年刊)を読んでいたかと思われる。

他方、私が、自我や個我という語を使わずに、「個」という語を使つたのは、個のありようは、社會との対応でさまざまな現れ方をするので、自己と外界とが未分化の様々のレベルでの集成的自己、利他的個人主義の自己、近代ゲゼルシャフトの分離独立した自我など、すべて包含させて、個と呼ぶことにしたい。

要するに、鷗外にとつて、処女作「舞姫」から絶筆「古い手帳から」まで、曲折はあるものの、共同体原理と個の原理との相克の問題は、終生のテーマであったと見てよさそうである。そこで以下、主にリズムと構成とキー・ワードに着目して、初出「興津弥五右衛門の遺書」から分析したい。

## 二 初出「興津弥五右衛門の遺書」

私は、初出「興津弥五右衛門の遺書」を読むたびに、引き込まれる

感じとわけのわからぬいら立たしきとを感じる。ちょうど祭の太鼓の単調なリズムが人を次第に興奮させ、ダンジリが衝突して血が飛び死人が出るような、恐しさと不安である。木下柰太郎が、鷗外の歴史小説は「徳川時代の武士道の道徳」を書いたものだが、「其根本に於いて我々民族の心に参通するものがある。」<sup>(3)</sup>と言っているが、全く同意である。冒頭文を読んで見よう。

某儀今年 今月 今日 切腹して相果候事奈何にも唐突の至にて、弥五右衛門奴老耄したるか、乱心したるかと申候者も可有之候へ共、決して左様の事には無之候。

傍線部のように、「今年今月今日」という類句的反复の切迫感、「老耄したるか、乱心したるか」という対句的反复、そして候候候候候という単調な反复、このリズムが、書き進めていく作者自身を興奮させ、彼がよりましになって、読者の心を興津の心に参入させ、興奮させて行くのである。興津は主君の十三回忌に殉死するのだから熱は覚めているはずという、不自然な設定も、もはやあまり気にならなくさせてしまう。

また、中心の香木論争においても、同型反复のリズムがある。二人は互いの主旨を汲まず、不用意な但し書きの「人倫の道に悖り候事は格別」に食らいつき、「お手前とても其の通り、道に悖りたる事は云々」とませ返す。また、相役が「これが武器拵ならば」別だと口をすべらせば、すかさず「武器と香木との相違は」と言い返し、揚げ足取りの会話になっている。その上、相手の恥や劣等感に触れる悪口が、売り言葉に買い言葉となる。「阿諛便佞」とののしれば「賢人らしき」と皮肉で返し、「若輩の心得違」には「若輩ながら心得居る」と言い

返し、「其道の御心得なき故、一徹」だとけなせば、いかにも「茶事の心得なし、一徹なる武刃者なり」と居直り、「身命に賭けても」という興津のそのかしに乗って、「お手前の表芸が見たし」と、ついに刀を抜いて、殺人事件に至るのである。尻取り的反复が次第に双方を興奮させ、命をかけても引くに引けない男（武士）の「意地」に追い詰めていくのである。意地の張り合いは、ゲゼルシャフトの論理による対立劇とちがって、いかにも日本的に屈折した情念による対立劇で（子供のかけ合い遊び——「或る朝」——にも残存）、「民族の心」のリズムだと言つてよい。

「青年」や「かのやうに」など、中期現代小説においては、冷静・知的・中立的な傍観者だった鷗外が、これは一体どうしたことか。志賀直哉は、鷗外の小説は頭ですっかり出来上がった小説で、リズムがないと言つたが、少なくともここには、明らかに「或る朝」の破滅回避以前のけんかと通う、「民族の心」のリズムがある。意地と意地と一体になって、死と破滅に向かう、凶々しい悲壮なリズムがある。我々は理性では抗つても、情念はそのリズムに感応して、日本人の血がざわめくのである。三島由紀夫の祭り好き、鷗外好きは、この悲壮リズムへの共鳴だと思ふ。

すでに有名なことだが、大正元年九月十三日の乃木將軍夫妻の殉死に「半信半疑」して、急拠「興津」を書き上げ、歴史小説の林に分け入ったとされている。が、より正確に言うならば、鷗外は殉死という死に方や忠誠への賛嘆よりも、十六日に新聞発表された乃木將軍の「遺言条々」に衝撃されて「興津」を書いたのではないか。先に見た「興津」の悲壮のリズムも候文体も、乃木遺書にならったのであり、

以下の思想主張も酷似しているからである。「遺言々々」を読んでみる。

第一 自分此度御跡を追ひ奉り、自殺候処恐入候儀、其罪は不  
軽存候。然る処、明治十年役に於いて軍旗を失ひ其後死処得度心  
懸候も其機を得ず、皇恩の厚きに浴し今日迄過分の御優遇を蒙り  
追々老衰最早御役に立の時も無余日候折柄此度の御大變何共恐入  
候次第茲に覚悟相定め候事に候。

続いて、第二、華族の汚名を残さぬよう養子は不要、祖先の墳墓の  
守護は血縁がするだろう、新坂邸は寄付。第三、資財は分与。第四、  
遺物は分配。第五、御下賜品は寄付。第六、書籍類も寄付。第七、祖  
先の遺書類は神社に預け、第八、出品の品は寄付。第九、妻静子の住  
む家だけ残して、第十、自分の死骸は医学校へ寄付、墓下には毛髮爪  
齒（義齒）で充分、恩賜の時計は軍服以外で持つことを禁ず、伯爵乃  
木家は呉々も断絶の事、というものである。

「国家の大礼、先祖の祭祀」の出所は、見過ごされてきた感のある  
第二以下にあったのである。また、ここには、人権や私有財産や子孫  
のためを当然と考える常識から見れば、過激なまでの無欲と、狂信的  
な天皇至上主義がある。彼が学んだ陽明学の知行合一の思想が過激を  
要求するのだろう。偶然ながら、鷗外がこののち歴史小説に書く大塩  
平八郎の行動の無私利他の過激さも、極右と極左の方向は逆だが、陽  
明学の故であった。

さて、鷗外はこの遺書のどこに心を打たれたのであろうか。候文体  
の「型」の美の中に、三十五年の己の情念を抑制した簡潔さ、「皇恩  
の厚き」「過分の御優遇」が候文体の虚飾でなく、痛い重い感覚であ  
り、その抑制のエネルギーの物狂おしさに圧倒されたのではないか。

鷗外遺書もどこかこれに似ている。分析的に見れば、乃木遺書は、「忠」という接近（母子型共同体）の原理と、「礼」という分離（父  
権型共同体）の原理とのせめぎあい、「恩」（降り積む負債）への律  
儀さと、「無」（恩返し）への潔さとの葛藤を、殉死という「みそ  
ぎ」で清算しているのである。

鷗外はここに、日本人の魂の叫びを感じ、「古言は宝である」（「空  
車」）、「忠」と「礼」、「恩」と「無」との葛藤の中にこそ、日本人  
の伝統的心が詰まっていると思ったのであろう。戦死した旗手への罪  
意識は欠如しているものの、ここに、神聖に近づく無礼の「罪」を恐  
れ入り離れようとしつつ、跡を追わずにはいられない、恥らいと謙讓  
の愛の形を見、感恩の律儀さと無欲の潔さを、一身に体現している  
人が現れたことに、衝撃を受けたのであろう。なぜなら、「青年」の  
利他的個人主義においては、恩は奴隷の道徳、忠義は過去の因習であ  
り、徳川時代の幽霊にすぎず、「かのやうに」においては、国家の大  
礼、先祖の祭祀は秩序維持に必要な、意識したウソであった。鷗外の  
観念的人工的忠義は、肝心の命が宿らない、動かぬ精密機械でしか  
なく、行き詰まっていたからである。

さて、乃木遺書から何を取捨して「興津」を書いたのであろうか。  
まず注目されるのは、興津は、他人に恩を受けることをたまたらない  
負債と考えていることである。これは、『菊と刀』における、恩は金  
銭貸借における負債感と同じだという指摘の三十五年も前で、「阿部  
一族」の内藤長十郎については、もっと簡潔に「報謝と賠償」と書く  
に至る。興津は、「借財等は一切無き某、厘毛たりとも他人に迷惑相  
掛け不申」とあるように、「恩」の負債感に過敏な人物だが、死体処

理は「近隣の方々へ頼入」るしかない。このたまらない負債感を序奏導入として、作品中核における、主君のお役に立つべき侍を殺した、人生たった一度の過ちの負債感、許されたこと、死に時が三十五年も遅れたことでよけいに降り積む「恩」の負債感の重さとして、描かれているのである。「おおい、新宅の松の字、来てくれえ、手を借せえ。」

(「遥拝隊長」)とすんなり言えるのが、井伏鱒二描く、相互依存的村落共同体の個なら、厘毛たりとも恩を受けたくないのに恩を受けた濟まなさというのが、鷗外描く、克己的武家共同体の意地なのである。鷗外は、乃木遺書から「恩」は取ったが、徹底的「無」は捨てている。

次に、興津ははたして乃木將軍が明治天皇に殉じたように、唯一の主君三齋公に殉死したであろうか。乃木將軍の場合は「忠」(母子型結合)と「礼」(父権型結合)との相克があったが、興津の場合は、前者の情緒性・奴隷性を排除して、後者の「礼」の結びつきにしているように思われる。三齋公の像には、次作の忠利のように、家来の苦衷を察して背中でもらい泣きする「情」や「慈悲」はなく、香木事件の処理の仕方は、父権の公正(義)と有無を言わせぬ支配力と威厳とを備えて立派である。従って興津の方もまた、文武兼備で、主命にまじり間違のない主君を崇拜し尊敬し、「此上なき」形で信任に応え、その結果やむなく生じた過失を助命されても、感涙にむせんだりはしない。乃木將軍と重ねて興津の言動をセンチメンタルに解釈しようとする限り、以下の疑問が続出して解けない。(1) すぐに接近するのでなく三十五年も離れて殉死するわけ、(2) 拜んでいる位牌が三齋のだけでなく三代の位牌であるわけ、(3) 殉死の対象は必ずしも三齋ではないらしく、忠利の死の次に「次で正保二年松向寺殿(注・三齋)

も御逝去」とあり、伊達正宗の死、光尚の死が続くその間に埋没させ、興津が三齋の死を惜しむ一語もないわけ、(4) 老病で死ぬのが残念だから、三代の主君の中では「殊に」恩顧を受けた三齋の十三回忌に合わせたと書くわけ、(5) 「忠」という語が唯の一度も出ず、「礼」が三回反復されるわけ、等々である。

鷗外は、意識して、(1) (5)の設定をした。乃木將軍の遺書から、情緒的・奴隷的な「忠」という接近(母子型共同体)の原理を捨て、「礼」という分離(父権型共同体)の原理を取った。そう変えたのは、密やかな乃木批判であり、同時に浪曲的殉死賛美の風潮への批判でもあろう。また、「妄想」の語句を借りるなら、人に隷属する乃木將軍は一人の主に会ったが、精神の自由に固執する鷗外は、多くの師には会ったが一人の主には会わなかったのである。

そこで次に、中心思想の「主命大切」と「国家の大礼、先祖の祭祀」であるが、「某は主命と申物が大切なるにて」とあるように、興津は主命という觀念を知的に尊び、三齋個人の命令に隷属しているのではない。相役が、家来の側からの主命批判や諫言は必要だと主張する思想は、一般論としては正しいが、相役自身珍品買いつけの命令に無批判に従って置いて、今更主君のいない所では「香木は無用の翫物」だから主君の目をごまかして末木を買えばよいと言うのは、不誠実、横着と言わざるを得ない。その不用意な一言の言葉尻をとらえて、興津は、「茶儀は無用の虚礼なりと申さば、国家の大礼、先祖の祭祀も総て虚礼なるべし」と言い放つ。興津の考えでは、相役が「香木は無用の翫物」だと言うことは、主君の茶道を蔑ろにし、細川家の家風を蔑ろにし、茶道の根本は礼であるから、ひいては、「国家の大礼」(朝廷

の重大な儀式、即位・立后・大葬など）や「先祖の祭祀」も否定する、無政府主義なのだと同喝したのである。相役がうろたえて刀を抜いたのも無理はない。江戸初期に無政府主義者が登場しては、歴史小説としておかしいのだが、鷗外は、大塩「平八郎の思想は未だ醒覚せざる社会主義である」と書いているのからすれば、相役を「未だ醒覚せざる」無政府主義者として、天皇至上主義者の興津に断罪させたのだと解される。興津の天皇至上主義は、主君三斎の恩にも涙をこぼさない彼が、「畏くも至尊の御賞美を被り（中略）落涙」したところに現れている。興津の「礼」の対象は、不思議なことに、三斎止まりでなく、細川家の家風を通して、究極「至尊」の天皇こそ「畏」敬の対象であった。そして『翁草』には、これらの語はない。江戸初期に天皇至上主義者がいようといまいと、これまた鷗外にはかまわないことである。時と所の色あいを帯びた『翁草』の筋を、歴史的衣装として借りたまでであって、鷗外にとって、現代の大逆事件、乃木殉死こそが大問題だったからである。

以上、初出「興津弥五右衛門の遺書」は、乃木遺書を藍本として、仮りに天皇至上主義者の立場から無政府主義を断罪させたものである。興津の個は、通説のような鎌倉武士的純情の忠誠心による、母子型共同体の個ではなく、「恩」の負債感と「礼」の至尊感との葛藤であり、父権型共同体に融合した個である、ということを見てきた。

### 三 「阿部一族」

初出「興津弥五右衛門の遺書」は、イヒ・ロマンの一種、書簡体に

よる告白だから、興津の意地は描けても共同体の生態は描けなかった。「阿部一族」はもっと客観的・科学的である。では、何をどのように科学的に客観化しているのかというと、「阿部一族」は、あたかも一個の巨大な生き物のような、不気味な藩共同体の生態と運動に、家単位の個が、あるいは従いあるいは抗いつつ、飲み込まれていくさまを、作者の全能視点から、鳥瞰・虫瞰しているようである。「彼ゾラにルゴン・マカアルの血統を追尋させた自然科学の余勢でもあらうか」（「なかじきり」）、日本の共同体のさまざまの個を、遺伝と環境理論で描いて、自然主義に対比して見せているようである。

まず、「阿部一族」の構成を、私は「雪崩型プロット」と名づけてみたい。雪崩は、積雪の自重に、傾斜面の支持力が堪えぬ時起きるという。左には、仮りに各節に見出しをつけ、（ ）内にキー・ワードを挙げてみた。

- 一 藩主細川忠利の病死（氣遣ひ・先例・應）
- 二 殉死の掟と内藤長十郎の殉死許可（掟・默契・目を掛け）
- 三 内藤家の殉死当日の様相（母）
- 四 十八人の殉死を許す忠利の心境（恩知らず・慈悲）
- 五 津崎五助の殉死（氣に入って・負けぬ・犬）
- 六 ここまでが社会意志の異常増殖（積雪）である。
- 六 阿部弥一右衛門の殉死不許可の事情と追腹（万事に気が付く・意地・妾・氣に入らぬ・兄弟喧嘩）

六は、長期にわたる主従の個人意志の異常増殖で、先の社会意志との相乗効果によって、ここに第一次雪崩が起きる。以上が前半。彼一人の悲劇に終わらず、これが要因となって、後半の群像の悲劇を呼ぶ。

七 阿部家相統差別と権兵衛の不敬事件（面目・不快）

八 阿部権兵衛の縛首・一族立て籠り・討手の手配（面目・是非に及ばない）

九 柄本又七郎夫妻の見舞と決心（気の毒・情・義・逆賊）

十 竹内数馬の決心（辱・棄てられた）

十一 高見権右衛門と小姓（待て）

十二 討入り

十三 討取りの報告（譲った）

十四 討手の賞罰（臆病・気を付ける・面目）

以上が後半。社会意志の巻き込み運動（連続型の第二次雪崩）である。

作品冒頭は、藩主細川忠利の病死に筆を起し、將軍家の大名に対する「先例の許す限りの見舞」と「氣遣ひ」とを書くことによって、日本中が母子型共同体だという大状況設定をしたもの。鷹の逸話は、社会意志増殖のきっかけとして設定されている。鷹でさえ恩を知って殉死した、いわんや厚恩を受けたあの男この男が死なないのは「恩知らず」だという、社会意志の増殖である。

次に第二節で、殉死の掟を設定し、その法としての特色が、ゲゼルシャフトの冷たく合理的な立法とは違って、ゲマインシャフトの情愛はあるが不合理不公平な「慣習」であることを示している。主君の「お許」が絶対に必要かと思えば、他方「黙契」や「懸許」がまかり通る。親疎によって法が目盛りが伸び縮みして、名誉の殉死と犬死の追腹とに、運命が分かれるのである。

ここで、内藤長十郎が十八人の殉死許可の典型とされているわけは、

忠利政権が本質的に母子型共同体であって、忠利が「人情世故に通じ」、「慈悲」第一の母性型であるのに応えて、内藤には甘えと節度で接する「子」の可愛気があって、「恩知らず」にされぬように、世間の冷たい風からかばってもらえたからである。内藤家の家風が、そのように彼を育てた。

家はひっそりとしてゐる。丁度主人の決心を母と妻とが言はずに知つてゐたやうに、家来も女中も知つてゐたので、勝手からも既の方からも笑聲などは聞こえない。

母は母の部屋に、よめはよめの部屋に、弟は弟の部屋に、ぢつと物と思つてゐる。主人は居間で軒をかいて寝てゐる。（中略）

一時立つ。二時立つ。もう午を過ぎた。

これは「阿部一族」の中でも名文中の名文で、「阿部茶事談」にはない。三好達治の「雪」の詩にどこか似てはいはしないか。「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ」。「母は母の部屋に、よめはよめの部屋に、弟は弟の部屋に、ぢつと物と思つてゐる」。主人は、母の中に安らぐ胎児のように、あるいは、墓の下に眠る死者のように、「寝てゐる」。

皆が生き物の運命を受け入れ、安らかで静かな気品ある、母性のリズム。「安寿恋しや、ほうやれほ。厨子王恋しや、ほうやれほ。鳥も生あるものなれば、疾う疾う逃げよ、逐はずとも。」のリズムとも遠く通うのは、「山椒大夫」の母が万物の母だからであろう。内藤家の家風は、互いに察し合い、各々分にふさわしい振舞をして、自然に相手を思いやる、日本的秩序の美の粹である。これは、気品ある母がかもしている家風で、長十郎は表向きは家長だが、まだ十七歳、母の愛

に見守られて、殉死許可の呼吸を身につけたのである。内藤自身は、太田豊太郎の「弱き心」を受け継いで、「弱みのある」とされているように、無意識の内にも、自分は社会意志の暴力の被害者だと思っているが、被害者であろうと殉死すれば社会意志の増殖の片棒をかつぐことになっていく。

次に鷗外は、「中にも津崎五助の事跡は、際立って面白い」と書いているが、これは、弱い犬ほどよく吠えるという、憎めない犬の生態に、いつしか犬牽の方が似て来ていて、そこがまた忠利の「氣に入つてゐた」という、二重に戯画的なおもしろさであろう。五助は、「それは殿様の犬牽ではないか」という、家老達の無神経なとめ方に、かえって劣等感を逆なでされ、「お歴々の衆に負けぬ」意地から、殉死は「とめてとまらぬ」ものになった。妻も側から負けるなど励ます。「犬骨折つて鷹にとられる」ということわざ通り、五助は、日頃の不満から、「お鷹匠衆はどうなさりましたな、お犬牽は只今参りませう」と高笑いし、上官を道づれに引込もうとする加害者となって、これまた社会意志の増殖に積極的な手を貸すのである。

阿部弥一右衛門の悲劇は、このように異常な社会意志の増殖の中で、父の判断力、指導力、権力の最も必要な時に、殉死の禁令を出さず、次々に情に流される母性でしかなかった、忠利の下で起きるのである。言われているような、「封建的領主の絶対権力」<sup>6</sup>など、鷗外の忠利は一度も発揮したことはない。むしろその欠如こそ悲劇の元凶として設定されているのである。

まず、阿部弥一右衛門は、家の中でも藩の中でも本質的に父性であった。阿部家の家風は、内藤家と対照的である。

「さうであらう。目の先ばかり見える近眼共を相手にするな。  
(中略) 恥を受ける時は一しよに受けい。兄弟喧嘩をするなよ。」

さあ、飄箆で腹を切るのを好う見て置け。」

彼は五人の子を統率する父権である。運命順応型包容よりも、知恵によって先を読み、判断し、指導し、命令している。また、「万事に氣が付いて、手ぬかりが無い」精勤は、あくまで現実逃避せず、藩政を守る「立派な侍」の役に徹しているのである。そのような弥一右衛門の顔を見ると、上位者のはずの忠利の母性は引込んで、わがまま気ままな反抗する「子」に退行する。何にでもいやと言うのは幼児的である。そのいらだちを弥一右衛門に投影して憎む。母子型共同体の人情には通じている忠利にも、自分の心だけはわかっていない。

第二に、彼はそのような忠利政権の訂正者・改良家であった。

だが己は己だ。好いわ。武士は妾とは違ふ。主の氣に入らぬからと云つて、立場が無くなる筈は無い。かう思つて一日一日と例の如くに勤めてゐた。

ここに彼の日頃からの思想が明かされている。「武士は妾とは違ふ。主の氣に入らぬからと云つて立場」はあるはずだというのは、忠利に「目を掛け」られている内藤らを「妾」の忠義、「氣に入」られている津崎を「犬」の忠義として批判的に見ていることであり、それを麗しい慈悲と忠義の一体関係だと思つて自己満足している、忠利政権に対する痛烈な風刺である。内藤家の血縁の母子と違つて、擬制としての母子型共同体には必ず腐敗が生じる。そのところを弥一右衛門は父権の原理によって軌道修正してきた。「青年」に言う、「利他的個人主義」の自己(意地)であろう。しかし、臣下の分(妾・犬)を越

えるリーダー・シップは、忠利からも家中の皆からも嫌われ、陰湿な総攻撃に会って窮地に追いつめられる。母子型共同体の安らぎにとつて、革命家のみならず、改良家も同様に、除くべきトゲにほかならない。そこで弥一右衛門は、自己のアイデンティティー（父権的立派さ）を、自身と子らと世間とに証明するために、自虐的に切腹して見せた。峰の雪が裂け、雪崩が起こったのである。

阿部弥一右衛門だけが父なき母子型共同体の欠陥を鳥瞰する目をもち（彼には父権のメトロノーム的欠陥はよくのみこめていない）、それが次の、子らの世代には、君臣関係もまた「兄弟喧嘩」になるかもしれないという、突出した認識力になって、前途の結束を子らに遺言したのである。

さて、「阿部一族」の後半、光尚政権は、忠利政権よりももっと急斜面の共同体である。父なく母なき孤児型共同体である。上に立つ光尚が基本的に子供であること、それを「地道」に導く家老の後立てがなく、意地の悪い兄（林外記）の言いなりになる弟（光尚）の政権といった不安定感がある。忠利父子には、「情を抑え」られない悪い遣伝子が、弥一右衛門父子には誇り高過ぎる意地という遣伝子が、それぞれの父より数段劣る形で伝わっている。そこへ、環境として、弥一右衛門の予見通り、光尚が外記の相統差別の策を用いて、阿部家侮蔑の空気をあおった。一周忌に不敬事件を起こした権兵衛の言い分は、「某は故殿様にも御当主にも亡き父にも一族の者共にも傍輩にも面目が無い。」とある。「——にも」の反復による切迫したリズムには、一年間の鬱憤が暴発した感がある。彼も父同様父権の立派さを理想としつつ、兄の器でしかない不面目に苦しんだ。兄的な権兵衛が、孤児

兄弟政権を自虐の形で批判した「兄弟喧嘩」のようなものである。他方、さとし包む父権なき光尚の「不快」もまた、「不快」の語の反復の興奮したリズムによって、そのやり場のなさが表されている。作者はそれを、「情を抑え欲を制する」父性（義）と、「恩を以て怨に報いる寛大の心持」の母性（情）との欠如だと説明している。社会は基本的に、父の「義」と母の「情」とを兼備すべきだと考えているのである。中国のような、「仁」によるヨコの兄弟型政権構想は、鴨外にはない。また、残る阿部兄弟の意地は、「——無い」の執拗な同型反復によって、彼らの自虐的反抗心を、よく表している。彼ら主従とも、怒れるスサノオノ命の末裔のように、根の国のリズムに乗って、死と破滅を急ぐ。それは、「青年」に言う「古い伝説の味わひ」とも通底していて、鴨外は「かのやうに」を書く時、記紀神話の国生みの男神女神から読み直していたのではないかと思われるのである。

後半の第二次雪崩は大型で、阿部権兵衛を飲み、弥五兵衛兄弟を飲み、討手の竹内数馬を飲み、畑十太夫、数馬の兄、近所の某も巻き添えにする。柄本家、高見家もあやうく巻き込まれそうになる。

とかく疑問の多い柄本又七郎の義と情の解決の仕方は、決して一人で情義を兼備した元龜天正の勇者ではないように思う。柄本は、二者択一のタイム・リミットが迫ると、思考停止、論理のすりかえ（阿部一族は悪人ではないと言っていたのに、のち、逆賊のようなものとする）によって、家共同体として、妻に母の「情」（見舞・気の毒）を分担させ、夫の自分は父の「義」（逆賊征伐）を分担し、難局を切り抜ける要領の良さを示している。それは高見権右衛門と対比されていて、作者から全面肯定されてはいないように思う。

竹内数馬の悲劇として、武道の名家に生まれて「辱」「汚れ」を受けた者のたまらなさはさて置くとして、「殿様(注・光尚)に棄てられたのは忍ぶことが出来ない」に注目したい。竹内数馬は、忠利(死んだ母)を慕い、光尚の中にも母性を求めているのである。「子」である光尚に、甘えたいのに甘えさせてくれないとすね、いじめる継母のように思つて反抗し、光尚への面当てに、忠利から拝領した白菊の香をたきしめ、兼光をさして、死装束で討入る。数馬も二十一歳、家長ではあるが、子供である。そのききわけのないやんちゃぶりが、忠利に気に入られていたのである。

さて、高見権右衛門は、とかく見過ごされがちだった人物だが、懐中鏡によつて戦死を未然に防ぐ周到さは、柄本の派手なげがとくらべて、「生」の原理の勇者だと思われる。彼こそ第一の功を賞されるべきではなかったのか。彼は謙虚にも、柄本が抜け駆けを罰せられないように、柄本をかばつて、柄本に第一の功を「譲った」。小姓をかばつたのも母性である。高見は母性である故に、孤児政権の下で無事でいられたのではないか。鷗外の「沙羅の木」の、「褐色の根府川石に白き花はたと落ちたり、ありとしも青葉がくれに 見えざりし さらの木の花。」に通う、つつましく暖かい美しさを感じるのには、私だけであろうか。これが、「安井夫人」につながっていくのだと思う。

以上、「阿部一族」は、前半において、一見安定して見える母子型共同体の不合理性による亀裂を描き、後半において、父権も母性もない孤児兄弟型共同体が、家単位の個を次々巻き込んで落下していくさまを、描いている。その情緒的共同体の中で、自己を、母・子・兄弟・継子・父とし、独立した自我をもたない群像の中で、阿部弥一右

衛門は、父的権共同体の「義」のみならず、非臣妾的な精神の自由をもった、「利他的個人主義」の自己として、突出している。作品の要の人物と考える。

#### 四 「佐橋甚五郎」と定本「興津弥五右衛門の遺書」

豊太閤が朝鮮を攻めてから、朝鮮と日本との間には往来が全く絶えてゐたのに、宗対馬守義智が徳川家の旨を承けて肝煎をして、慶長九年の暮に、松雲孫、文或、金孝舜と云ふ三人の僧が朝鮮から様子を見に来た。

「佐橋甚五郎」の冒頭文は、前二作の閉鎖性とはちがって、幾分外国に開かれてゐる共同体であり、どこか人を食つたような感じがある。ついで、朝鮮の使いにまじつて、徳川家康の肝を冷やしに来た「太い奴」、佐橋甚五郎とはどんな人物であろう、何のために二十四年後、家康の眼前に現れ、追り返されたのであらうと思わせる、ナゾめいた導入部分が続く。

蜂谷との賭の事件は、佐橋の人物紹介であり、彼の行動原理をよく表している。「甚五郎は鷲を撃つとき蜂谷と賭をした。」の「賭」とは契約であり、「武士は誓言をしたからは、一命をも棄てる。」「誓言を反故にする犬侍奴」の「誓言」もまた契約である。「自分の大小を代わりに残して立ち退いた」の「代わりに」とは、商業における等価交換である。蜂谷が家宝第一の家共同体的自己であるのに対し、佐橋はその立派な大小がほしいという利己的目的達成のためには、「誓言」をタテに、手段を選ばない。人格の一部である才芸を武器に、相

手を殺して目的を達する。一見、前二作にあった意地の情念はなく、冷たく堅い合理的人間關係に立つ、ゲゼルシャフトの近代的自我のようである。

他方、家康は、細川忠利のような母性ではなく、父権的共同体の支配者として、年はとつても「めつたに目くらがしは食はぬ」判断力、統率力を備えている。そのためならば、時と場合によっては、「甘利はあれを我子のやうに可哀がつてをつた」という、母性的情愛もよしとし、他方、「約束通り甚五郎を召し出した」とあるように、契約原理も使い分けていて、「雑居的無秩序」文化性において、遠く「舞姫」の天方伯に連なる。おそらくは、この家康造形のモデルは、山県有朋なのではないかと思われる。

が、その雑居的無秩序性を佐橋から見ると、非合理、「道理」の欠如、偽善、醜惡そのものである。彼のことを家康が「むごい奴」と言うのは、それを命じ、利用した家康の自己矛盾と見える。佐橋は「家康を鼻の先であざ笑ふて」（広告文）、才能を頼りに、自由の天地へ飛び出して行った。ここには、共同体の閉鎖性に風穴をあけたような、一種さわやかな感じがある。ところが、その彼が、二十四年も経って家康の目の前に現れ、家康をして警戒させるということは、父権的共同体に対する利益社会の自我の見切りというだけでは、到底説明のつかない意地の情緒がまつわりついている、と見た方がよい。

蜂谷との賭の事件の時、佐橋は十六歳であった。その時の彼は、「誓言」にもとづいた自利の追求は「道理」だと考えていた。これは、従兄の家に同居している孤児という境遇から、かたくなな強がり、情緒性の欠如が生じたものであろう。ところが、家康の「そちが話を聞

けば、甚五郎の申分や所行も一応道理らしく聞こえるが、所詮は間違うてをるぞよ。併しそちも云ふ通り、弱年の者ぢやから、何か一廉の奉公をいたしたら、それをしほに助命して遣はさう。」という裁きの中に、彼は、情義兼ね備えた父なるものを感じ取り、尊敬の念を起したのではないか。甘利の髻を「麴鼠のやうに身軽に」持ち帰ったのは、家康に認められたい、家康にほめられたい一心であり、切ない子供心である。だが家康は「一言も甘利の事を言はなんだ。」佐橋の中で一つしゃぼん玉が潰れた。若御子の軍功についても、機械的に加増はされたが「賞美の詞が無かつた。」。二つしゃぼん玉が潰れた。それでも彼は家康に対する奉公の念を失わなかつたが、最後に、尊敬する家康の口から「むごい奴」と言われ、人非人として忌み嫌われていたことを知って、家康を見切つて、亡命したのである。頭ではもとの合理主義者に戻つたつもりでも、心は家康の仕打ちを忘れることはできなかったのであろう。家康に、自分の寝首を搔きに来たと恐れさせた。家康が彼を監視の届かない所に手放してしまえば、何をしかすかわからないと思ひ、人間の情愛を平然と踏み破る殺人機械と見て、機械として利用だけはして、言葉がけなどしようとも思わないなら、その思惑通り、朝鮮人に化けて殺人機械がやって来たと思わせたい。しかし外交上、佐橋を殺すわけにはいかないと悩ませたい。老獪な狸親爺の仮面を引きはがして、震撼させ、日本中を引つ掻き廻したい。というような屈折した情念ではあるまいか。これは、甘えの変型のすねた意地（広告文に「意地強きすね者」とある）であるが、家康も佐橋自身も、それに充分に気づいているかどうか。

家康にとって、佐橋はトリック・スターである。自己の影、仮面が

悪とし抑圧している、生きられなかった自分である。仁王（秩序・善）が足元に踏みつけ手放さない、天邪鬼（自由・悪）である。それは、作者鷗外にとっても、読者の我々にとってもそうだからこそ、佐橋に、倫理の束縛を解き放ったさわやかさを感じてしまうのだろうと思われる。

鷗外は、意識の上では、家康（山県有朋）に対し、「当局が巧に舵を取つて行けば」（「食堂」）、佐橋（無政府主義者）のような「不遇な人間」は増えずに済む、しかし冷酷に弾圧するばかりでは激成しかねない、という諷諫をした。だが、無意識の内に、佐橋に喝采し、山県という仁王の足の重みと監視をすり抜けて、自分も自由に生きたいという気持ちだが、佐橋を忌み恐れつつもこの作品を書かせたのである。

次に、「佐橋甚五郎」を脱稿して一カ月後に、「興津弥五右衛門の遺書」を改稿した。

周知のように、これは、香木事件はそのまま残して、外枠を新資料によって全面的に改稿し、ほとんど別作のように作った。つとに、改稿は失敗であったという批評が強く、私も鑑賞の立場から言えばそう思うのだが、作者の創作論としては、中味と外枠とで主題が分裂したとは思わず、これはこれで新しい小宇宙を造りえたと考えていたのではないかと思う。

まず、文体のリズムが、初出の切迫した死と破滅への誘いのリズムから、単調で、落ち着いて、ゆるやかで、はるかな生死の連続のリズムになった。

某儀明日年来の宿望相逢候て、妙解院殿御墓前に於いて首尾好

く切腹いたし候事と相成候。然れば子孫の為め事の顛末書き残し置き度、京都なる弟又次郎宅に於いて筆を取り候。

私は実は、「妙解院殿」（忠利）の「御墓前に於いて」という所で失笑してしまう。盛大な殉死ショーにおいて、興津が自分の殉死する相手をまचाがうのは、盛大な結婚披露宴で花嫁が別人と入れ替わっていても気がつかないのと同様である。ここには、初出においての興津は必ずしも三斎に殉死したわけではないということが、さらに漫画的ミスとなって露呈しているのである。それはさて置き、興津は細川家という共同体に守られ、殉死の手はずも首尾よく運び、弟に見守られ、弟宅という家屋に守られ、子孫は延々と続いていく安心感に守られて、遺書を書く。母性的に守られてあることが、反悲劇的な安定感と継続感のリズムをもたらしている。

次に、祖父・父・兄・自分の順に、紀伝体的叙述が続くわけだが、「某祖父は——、父才八は——、兄九郎兵衛一友は——、某は——」という同型反復が、尻取りの切迫ではなく、遠く間を置いて続き、さらに遺書のあとの、作者による子孫の叙述もまた、「——は、——は、——と、はるかに明治まで続く。これが単調平坦なるかな連続のリズムを生んでいる。定本の興津は、もはや初出の「礼」と「恩」という自己の考えをもった個体ではなく、祖先から子孫へと連続する家共同体の直線上の、小さな一点にすぎない。遺伝子にすぎない。父の裏切り事件も、彼の香木事件も、興津家の歴史の一コマを、望遠鏡でのぞくように遠い感じがする。父景一の赤松家に対する裏切り事件は、父が仕えている当の主君赤松殿への忠誠という観点から見れば、確かに裏切りで、興津の主命絶対と分裂する。しかし、定本の「興津弥五右衛

門の遺書」は、細川家代々と興津家代々との、「恩」と「忠誠」の關係を書いたものであるから、興津にとつて、赤松家への父の不忠など、問題ではないのである。

興津の殉死の動機を見よう。

某熟先考御当家に奉仕候てより以来の事を思ふに、父兄悉く出格の御引立を蒙りしは言ふも更なり、某一身に取りては、長崎に於いて相役横田清兵衛を討ち果たし候時、松向寺殿一命を御救助被下、此再造の大恩ある主君御卒去被遊候に、某争でか命いたさるべきと決心いたし候。

ここには、彼一個の恩だけでなく、第一に細川家代々から、父兄が受けた恩があつて、第二に（「再造」）、彼自身が受けた恩があつて、その両者を彼が恩返ししようとする決心したことがわかる。父の赤松家を裏切つてまでした当家への功績は数えない。兄の、鳥原の乱での功績も数えない。自分が命がけて持ち帰った香木によつて、天下に細川家の名を挙げた功績も数えない。父兄・自分と、受けた恩だけを数える。算術的に不合理な、一方給付の思想がここにはみられる。もう一つの特色は、恩が家代々の連帯責任の負債だということである。

現代では負債が大きい場合は相続放棄を選ぶことができるが、興津は連帯負債を懷疑しない、律儀な人間として設定されている。そして、これは、興津家代々の内でもとりわけ「大恩」を受けた自分が負債を返せば、それで一挙に清算され、すっきりするわけではない。遺書の末尾には、弟又次郎以下、一家眷族がさらに、興津のため盛大な殉死ショーをしつらえてもらった細川家への新恩を、「子々孫々相伝」えて、連帯責任で負債を返すことを、興津は命じているのである。「子々

孫々相伝、某が志を継ぎ、御当家に奉対、忠誠を可擢候。」とあるのがそれである。この異様な重圧感、束縛感、ほとんど吐気がするばかりである。

これは、前月に、「佐橋甚五郎」において、極左の利己の不気味さを書いたので、その揺り戻しとして、定本「興津弥五右衛門の遺書」において、極右の利他の不気味さを描いてみせたものと思われる。常に物事の両端をたたいてみずにはおられない鴉外の認識欲が、右・中・左・右と、メトロノームのように思考運動をさせるものと思われる。そして鴉外自身の立場は、左右どちらにも頭をふつて、「阿部一族」の阿部弥一右衛門と高見権右衛門とを合わせたような、情義兼ね備えた、中道の社会改革の立場をよしとしていたと思われる。そして、仮りに乃木將軍の壘に拠り、あるいは仮りに無政府主義者の壘に拠つて、地位と境遇のために生きられなかった自己である、左右のトリック・スターをも描いてみたのであろう。第一歴史小説集「意地」の構造は、かくして、釈迦三尊像のような、あるいは、ヤジロベエのような構造になった。

これを出版した時、鴉外は自信に満ちていた。「意地」広告文に、次のように書いた。

「意地」は最も新しき意味に於ける歴史小説なり。従来の意味における歴史小説の行き方を全然破壊して、別に史実の新しき取扱ひ方を創定したる最初の作なり。其の觀察の点に於て、其の時代の背景を描くの点に於て、殊に其の心理（人格）描写の点に於て、読者は必ず此の作に或る驚くべき新意を見出さん。

これは、「遂に、新しき持歌の時は来りぬ。そはうつくしき曙のご

とくなりき。あるものは古の予言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばり」（『藤村詩集』序）という興奮のリズムに、どこか似ている。それはそのはずである。これは、近代歴史小説の、夜明けの宣言だからである。乃木將軍の「遺言条々」に導かれて、彼は思いがけぬ金鉢を発見したからである。それは決して西洋の自我の側から日本共同体を批判的に見た歴史小説ではなく、西洋的な批評眼も生かしつつ、日本共同体の内部に分け入って、その得失を見た歴史小説であった。そこには、因習として葬り去るには惜しい、「民族の心」、日本人の魂のリズムがあった。しかも、それは観念的人工物ではなく、<sup>エッセ</sup>確実な手応え、証拠に基づいていた。すなわち、「古言は宝である。」という、古言の命である。「恩」という一語の中に、降り積む負債感の重荷を必死に返す、昔の人たちの律儀さを見た。人を肅然とさせる品位を発見した。「恩」と「礼」、「氣」と「意地」、「情」と「義」、「恥」、「誓言」、「道理」などなど。それをのちに、「歴史の自然」とも呼びかえるのである。鷗外としては、古言の中にこそ、神話や伝説から、明治・大正の重大事件にまで通底する、日本文化の核があった、それを捉えた歴史小説集を世に問うたつもりだったのである。しかし、文壇は、まさしく「古言」のいのちのわからなさのために、ルース・ベネディクトでなく、日本人であったがために、日常無意識に「恩」の交際をしながら、意識の上では嫌悪し、ついに、「意地」の決定的新しさがわからなかったのである。

注(1) 木下太一郎「鷗外全集著作篇刊行の辞」（昭11、岩波版全集の内容見本(一)）

(2) 磯貝英夫「近代的な自我のさまざまな確立」（昭51『講座文学7』岩波書店）

(3) 木下太一郎「森鷗外の文学」（昭19執筆、『森鷗外研究』昭22、長谷川書店）

(4) 『世界大百科辞典』（平凡社）

(6) 尾形仿『森鷗外の歴史小説』（昭54、筑摩書房）

(5) (7) (8) は、それぞれ、伊藤真一郎、相原和邦、李国棟各氏の、合評会における助言である。

付記・この論文は、平成元年度広島大学国語国文学会秋季研究集会（平成元年十一月二十六日）に、同名の題目で発表したものに補訂を施した。